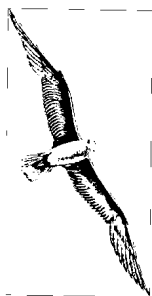


雪崩のくる日 辻邦生



中央公論社

雪崩のくる日

定価一四〇〇円

昭和五十五年五月一日初版印刷
昭和五十五年五月十日初版発行

著者 辻 邦 生

発行者 高 梨 茂

印刷所 精 興 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話（五六一）五九二一

振替東京二二三四

©一九八〇 検印廃止

雪崩のくる日
目次

ある壊滅

秋の別れ

夜明け前の庭

雪崩のくる日

教授たちの夜

落日のなかで

7

35

71

101

135

165

ブッペン・クリニック

195

聖路加病院まで

221

森の歌

251

城の秋

279

マイヤーホーフの春秋

309

青い葡萄

339

装幀
中島かほる

雪崩のくる日

——「ある生涯の七つの場所」

ある
壊滅

宮辺音吉が鉄道技師のジャン・ラングロアと出会ったのは「熊^{ウルス}」と呼ばれた組合関係者の紹介があったと思われるが、詳しいことはわからない。

熊^{ウルス}や組合の人たちと一緒に出かけた、人民戦線の成立に先立つ国会包囲のデモの頃は、もうラングロアと知合っていたらしいが、日記類にはまだ名前は登場しない。しかしあとから思い出ふうに書かれたものを読むと、かなり前から知っていたようである。

ラングロアは痩せた浅黒い陰気な顔をした男で、フランス国鉄のパリ監理局のどこかの部課に勤めていた。髪を短く刈り、革のジャンパーを着て、休みには緑いろのオートバイに乗るのが趣

味であった。彼が勤めから帰ってきて、ひとりで中庭でオートバイの手入れをしていると、どこからともなく若者や子供たちが集ってくる。彼らは遠慮がちにひそひそオートバイの性能や型式などを囁き合う。なかには自分の知識をひけらかすように、わざとラングロアに聞えるような声で言う若者もいたが、ラングロアはまわりに人が集っていることにまるで気づいていないように、執拗に車を磨いているのであった。

あの時代にオートバイを持つということはかなり珍しがられた趣味であり、何かにつけ話題になったのであるから、やはりどこかに自己顕示の欲求がなかったとは言えないが、ラングロアはかたくなと言っているほど周囲の人々との交渉を嫌ったらしい。

ラングロアが宮辺と付き合っていたのは、こうした厭人的な傾向と無関係でなかったかもしれない。宮辺が外国人であることや人懐っこい性格だったことや友人の少かったことなどから、ラングロアも少しづつ心を開いていったのであろう。詩人（ポエタ）の場合もそうであるが、宮辺音吉のなかには、孤独な心と呼びかける何か共鳴板のようなものがあつたのであろうか。

当時、宮辺が親しくしていた人々はほとんど、国会包囲デモを挟んだその冬の終りから春にかけての政治闘争に参加している。そのなかで熊（ウルス）などが最も共産党にシンパシーを示しており、ラングロアはむしろ絶えず当時の共産党の革命情勢の判断については懐疑的であつたようだ。

宮辺音吉がラングロアに訊ねていたのはいつもこの情勢判断の相違の理由であつたらしい。というのは、宮辺の眼にはラングロアが社会主義的な理想を抱きながら、熊（クマ）たちを批判、攻撃する

のは、どうにも彼の尺度では理解しかねたからである。

「ラングロアは私の質問にあまりはつきりした答を与えず、奴らはばかやろうだとか、物を冷静に見ていないのだとか、コミンテルンだって勝手な都合があるのだとか言うだけだ。それにラングロアが時々覗かせる孤独な表情は普通ではない。ぼくはそんな顔を見ると、ついこの男の過去を訊いてみたい誘惑に襲われる。彼が北アフリカの植民地で働いていたのは本当らしい」

当時ラングロアの意向とは別に、左翼の人々のあいだに、穏健な民主勢力をどこまで評価するか、という問題をめぐって、かなりの対立が見られた。共産党だけがそれに否定的で、事あるごとに、民主勢力の結合を低く評価していた。

その年のはじめ、宮辺はカルティエ・ラタンのカフェでラングロアとこの問題について話合ったことを誌している。

「ラングロアは昨夜三時まで討論があったと言って、血走った眼をしている。

『で、結論は出たのかい?』と私が訊ねる。

『いや、出るわけがないさ。党の奴らは革命路線以外はすべて日和見主義として批判しているのだからね』

『君がそれに反対する理由は? 君の反対が根拠を持つと思えるのはどうしてなのだ?』

『現実を見ればわかるよ。いたるところで人々は党から離れているじゃないか。党はただ、離反者を裏切りだ、脱落だ、日和見だ、ときめつけているけれど、問題はそんなことを言っていない

むことじゃないんだ。現実には、そういう崩壊が起っているんだよ。そのことを見なければいけないんだ。その事実のほうを尺度にして、理論やテーゼのほうを計らなければいけないんだ。それを……』

ラングロアは煙草をもみ消すと、また新しい一本を取り出して火をつけた。

『ぼくは彼らに何と言われようと、とにかく、このことだけは眼を開いてもらいたいんだ。なんでこう石頭の連中ばかりそろちまったんだろう。いま大切なのは、とにかく民主勢力を集めることなんだ。そのなかで、当然ながら、党が果す役割がどんなに重要であるか、誰だってわかっている。それなのに、その党のお偉方がてんで石頭で、ただモスクワの革命テーゼに従う以外に能がない。事態はどんどん変っているんだ。それを本当にわからなければ、危機はいっそう深刻になる。わかっているのはドリオだけだ。ドリオはモスクワへ直訴までしているんだ……』

宮辺音吉がこうした議論をどこまで支持したのかわからないが、少くとも共産党側からの批判に耐えて、自分たちの行動のプログラムを実行していった誠実な態度にはかなりの共感を示している。

こうしたラングロアに対して宮辺が単なる政治的活動以上の関心を払ったのは、ちょうどその頃、アンヌ・ピションと呼ぶ女性が彼らの生活のなかに現われたからである。

「それはデモやストライキが頻発していた冬の終り頃だったと思う」と宮辺音吉は回想のなかで書いている。「私たちが組合の連中とモンパルナスのカフェで休んでいると、毛皮を着た三十位

の女が、ちょっと戸惑ったような様子で入ってきて、隅のほうに腰をおろした。私はそのときラングロアの顔が妙な具合に歪んだのに気がついた。それは私がいつものように党の綱領を擁護して、ラングロアの説に反対していた最中に起ったので、すぐ私にわかったのだ。ラングロアは一瞬食い入るような眼で女を見て、それから不意に眼をそらせた。そのあとラングロアは急に無口になり、眉のあいだに皺を寄せ、何か考えるような様子であった。

私は大してバリの女を見知っているわけではないが、毛皮の女を見たとき、パリにはあまり慣れていない女であるような気がした。女は明らかにそこで誰かと待ち合わせている様子であった。ちょうどそのとき組合の誰かが私に日本のことを質問したので、ラングロアの話が突然途切れたのもそのためであるように見えて、不自然な感じはまったくしなかった。しかし私は、彼が一瞬幽霊でも見たようにはっとした表情をし、それから急に顔をそむけたその様子に、ただごとでないものを感じた。

しかしこのことは仲間の誰も気づいてはいなかった。私たちが立ち上ってぞろぞろ外へ出たとき、ラングロアがそこにいないのを知っていたのは私だけであった。彼は一緒に立ち上ると、電話でもかけてくるような様子で店の奥にゆき、しばらくためらってから、女のほうへ近づいたのである。

私は店の入口に立って、仲間と別れた後、しばらくラングロアの姿を見ていた。

店の前を、車に乗った青年たちの一団が『ドゥーメルグ万歳』を叫びながら走り去った。左翼

陣營が正統論を戦わして、結果的には分裂してゆくなかで、元大統領のドゥーメルグが、火中の栗を拾うために、挙国一致内閣の首班にかえり咲いた。そのドゥーメルグ支持が日に日に強くなってゆくことも、ラングロアを苛立たしていたのであった。

雪のようなものが舞っていた。ガラス扉が開くたびに凍てついた空気が流れこんできた。

ラングロアは女に何か喋っていた。はじめはひどく敵対的な様子だったが、そのうち、肩をすくめたりしていくらか態度が和らいで見えた。女は何か書いて男に渡した。

『連中は先に帰ったよ。ぼくらは同じ方向だから待っていた』

ラングロアがこちらへ歩いてきたとき私はそう言った。さっきのような不機嫌な様子はその顔から消えていた。

『ちょっと知っている女に会ったんだ』

『さっき、びっくりしたような顔をしたのでわかった』

『五、六年ぶりだったから驚いたんだ』

私たちは陰気な駅裏の通りを歩いた。ラングロアと私のところとは道一つ離れているだけだった。私の家のほうが近かった。ラングロアは私の家を見上げ、『君の家には、まだ下宿する部屋があると言ったね』と訊いた。

下宿の主婦は以前から間借り人を捜していた。

『ああ、部屋は空いている』

彼は部屋代のことなどを訊き、それから首を振ると、

『じゃお休み。長いこと待たせてすまなかった』と言って別れていった。

数日して、ラングロアが私を訪ねてきた。

『君のところの部屋を借りたいと思うんだがどうだろう？』

『君がか？』

『いや、ぼくじゃない。この前カフェで会った女がいたね、あれだ』

『ぼくは異存はないし、おかみさんだって喜ぶと思うね』

下宿の主婦は南仏訛を鼻にひびかせながら『私は大へん嬉しい』と言った。

その日おそくトランク一つ下げて女がラングロアに連れてこられた。女は毛皮を着込んでいた。

『マダム・ピシヨン、アンヌ・ピシヨンだ。よろしく』

ラングロアはそう言つて女を私に引き合わせた。私は女の、柔かな、湿った手を握った。

カフェで見たときより、ずっと若く見えた。そばかすのある、どこかおどおどした顔をした、

青い眼の女だった。痩せた頬の窪みにかげができていた。そのせいか、臆病そうな青い眼のなか

に、ひどく人を小馬鹿にしたような、傲慢な色が時どき光った。

一種得体の知れない荒涼とした感じがその身体に漂っていた。

下宿の主婦は間借り人を世話してくれて満足だが、私は日本人の客を期待していた、と言った。

『しかしぼくの友人は信用の置ける人物です』と私は言った。